

2-5 工事ストップの懸念！100万m³の残土処理方法の検討

1. 立場と仕事

入社して20年が過ぎ、現場技術者として社内外からの信頼を獲得してきた。そのようなときに、大規模現場（JV スポンサー・職員30名・現場作業員200名）の現場代理人かつ監理技術者として現場運営すべてを任される機会が訪れた。

2. 遭遇した事態

担当した工事は大都市近郊の高速道路地下構造物の構築現場であった。当該工区において、掘削土中に自然由来の重金属土が計画段階より予想されており、発注時には掘削残土をセメント原料化処分する計画となっていた。しかし、隣接工区も含めた膨大な量（100万m³規模）の残土を、工場側が受入れることは不可能であり、セメント原料化処分の代案として洗浄処理が検討されたが、満足できるレベルまで無害化することは技術的に困難であることが判明した。最終的に、発注者は残土を海底埋戻しに利用する方針を決定したが、残土を海底に埋め戻すという方針は決定したものの、仮置き場や運搬船への積込みを行う港が見つからない状態で、このままでは残土が搬出できず、工事がストップしてしまう懸念があった。

工事を継続するためには、残土の仮置き場や運搬船への積込みを行う港を開拓する必要があった。また、海底への埋戻し処分となると、当初のセメント原料化処分での工事費に比べて減額となり、当初、見込んでいた利益が確保できないなどの問題も発生した。

3. 対応内容とその結果

まず、自らが率先して、仮置き場や運搬船への積込みを行う港を探しに回った。自分が事務所のメンバーの規範となるように、主体性をもって生き活きと仕事に取り組んだ。

また、港の整備や仮置き場の整地作業などの追加工事について、自身のJVの工事確保だけを考えず、隣接工区のJVも含めて工事分担を調整した。そして、各工区のJVが当初の工事額より減額にならないように配慮した。

需要過多によるダンプの高騰が問題となったが、工期遅延のリスクとを総合的に判断し、費用を投入して台数を確保した。結果として工期を守ることができ、無事に工事を完了した。

自分の工区だけでなく、他の工区への配慮を行ったことで、他工区のJVから不満が出ることなく、皆が面目を保つ（Winner）ことができた。また、発注者からの信頼も得ることができた。

相手（発注者や他工区）の立場に配慮しながら話を進めること。あるいは、自分だけが勝てば良いのではなく、自分はどこの部分で負けられるかを考えることの大切さを学んだ。（詰め将棋のように、こちらがどうすれば、相手はどうするというを常に想像する）。